
セミナーレポート

多文化共生をテーマに、国際セミナーを開催しました！

香川県内の外国人登録者数は、2008年12月時点で8786人と、20年間で4倍以上に増加しており、言葉の問題を含め、今後様々な問題がおこると想定されます。それに伴い、関係団体が連携して対応していくことが求められています。

今回のセミナーでは、外国の方を取り巻く行政、現場で支援に取り組むボランティアや教員の方、地域で生活している外国の方等様々な立場の方が参加し、いろいろな立場から問題・課題点を出し合い、住みやすい元気な香川にするためのアイデアを話し合いました。

【「データで見る香川県」香川県国際課 田川課長】



香川県内の外国人登録者数は、2008年12月時点で8786人と、20年前に比べ4倍以上の増加が見られます。

国籍（出身地）別では1位中国52.73%、2位フィリピン14.42%、3位韓国・朝鮮11.79%となっています。また、総人口に占める外国人登録者数が一番多いのは丸亀市で、110,727人の総人口に対し、1,491人と1.35%を占め、三豊市、観音寺市と続きます。

在留資格別では、1998年から減っているのが特別永住者（20%→9%）定住者（20%→9%）、逆に増えているのが特定活動（6%→25%）研修（12%→18%）です。

都道府県別外国人の割合では、香川県は四国の中でも一番多く、全国では26位です。（30位徳島県、32位愛媛県、42位高知県）

県内外国人登録者数の増加に伴い、香川県では、「外国人住民と共に暮らす香川づくり推進計画」を策定し、（財）香川県国際交流協会と連携しながら様々な事業を行っています。

【講演 「多文化パワーの社会を目指して」 庄内国際交流協会副会長 山口考子氏】



“われら地球家族”を合言葉に、草の根の国際交流活動を続けられている山口氏。山形県在住外国人の生活・言葉・医療など様々な面でサポートを続けられています。

嫁がいない、後継者がいない、若者がいないという、ないないづくしだった山形県。実は、行政が全国で初めて「結婚難」を深刻な社会問題として、国際結婚に関与したのが山形県です。現在国際結婚は76組を超え、子どもたちは、ハーフではなく、ダブルという二つの文化を持つ人間として、地域で活躍しています。これは地域や関係者が彼女たちを積極的に受け入れ地域の人材として考えてきたこと、また彼女たちも地域に溶け込もうとし、パワーを発揮できたことが一因と考えます。その中でも多文化社会に向けて在住外国人が地域に活力をもたらした一例「梅ちゃんキムチ」の、仲間を巻き込み全国規模のビジネスに発展させた梅子さんの話は印象的でした。

海外から来た花嫁にとって、文化・風習・気候も違う日本。出産・育児ともなれば身近に信頼する人がいない中、ストレスは図り知れません。山口氏もブラジルで長男をご出産されましたが、見知らぬ土地での心細さを抱えていた時に、現地の方々から子育てのアドバイスを受けたことがとても心強かったと等ご自身の経験を交えながらお話いただきました。

生活・医療面だけでなく、抱えている問題には言葉の壁もあります。「日本語教室」で習った日本語を学んでも家族の話している言葉が分からないといった問題もあったそうです。彼女たちを日本人に同化させてはならないという山口氏の言葉にはっとさせられました。

～参加者の声～

- ポジティブに行動するというパワーをもらうことができました。心を広く、ということが多文化共生の社会には必要だと考えました。
- 多文化共生のヒントをたくさんいただきました。何よりたくさんの方の元気とパワーをいただいたことは、今後の励みになります。ありがとうございました。
- 山口先生の行動力、ポジティブシンキングが気持ち良かったです。話の内容だけでなく、話し方にも魅力を感じました。
- 本当にパワフルな方で、香川でも何ができるのではないかと気持ちにさせられました。
- 「心の中で思っていれば必ずできる」ということがとても心に残り、また実際にそうやってきていることに感激しました。
- 実体験を通してのお話と、そこからの理念がとてもよくわかって気持ちよくなりました。

【実践報告「日本語支援が必要な子どもたちへのサポート活動について」】



平田氏、向井氏（日本語サークル「わ」の会）、三木氏（高松市市民政策部市民協働推進室長）、山下氏（香川大学教育学部准教授）

県内には日本語支援を必要としている児童・生徒が29校に56名（2008年度）います。高松市教育委員会では、そのような子どもたちに対し、母語が理解でき、日本語や生活適応の指導などができる日本語指導者を、24時間程度学校に派遣しています。

さらなる充実を図るため、今年度、高松市と日本語サークル「わ」の会との連携で、学校現場における日本語支援事業「日本語支援が必要な子どもたちへのサポート活動」を実施しました。このように行政とNPOが連携し、ボランティアが学校現場で日本語を支援するのは香川県で初の試みであり、現時点では事業の規模は小さいものの、今後関係者が協力し合って、子どもたちの支援を行っていくための重要な一歩だと言えます。

今回の報告では、支援を受ける保護者・支援するボランティア・行政・日本語教育の専門家とそれぞれ違った立場からのお話を聞くことができました。支援の必要性や課題、そして行政・学校・家庭・地域・ボランティアなど、子どもたちを取り巻く各関係者が連携して課題に取り組んでいくことの重要性を改めて実感しました。

このような取り組みが県内の他地域へと広がっていくことを期待しています。

～参加者の声～

- いろいろな立場からの声を聞けたことがよかったです。たくさんの人にも、この声をとどけられたらいいと思いました。
- 今後も支援活動が継続されることが必要であると強く思いました。
- もっとも有意義だったと思う。考えさせられ、「実践」につながる内容だった。
- 実際にあったことの話であるので、とても参考になりました。
- 事情がよくわかって、今後の参考になりました。
- NPO—行政—現場 立場の違いから出てくる問題がよくわかった。「協働」の意義について学べた。
- 行政とNPOの協働推進の効果的な進め方や、行政の姿勢（取り組み）も参考になりました。
- 学校との連携の必要性が理解できた。
- 現場、学校などの先生や公的な力も借りながら、少しずつ活動してきた、そのような様子を感じた。交通の便で苦労している話も聞けた。
- 国際化した社会と学校教育のギャップを強く感じた。

【ワークショップ 「地域における多文化共生について考えよう」】



ワークショップでは、8つのグループに分かれ、外国人とともに生きるための地域づくりについて考えました。各グループには、行政関係者、教育関係者、日本語ボランティア、保護者などが交じり、それぞれの立場から意見を出し合い、発表しました。

～受講者の声～

- グループの中で話しあうことは、それぞれの立場で考え、様々な意見が出るので、頭の中が活性化されました。課題の浮き彫りがあり、解決のヒントも得られました。
- いろいろな意見が出て、勉強になった。個人・団体に出来るものを具体的に探し、出来ることはやれたらいいと思う。
- 一人の考えでは、少しのアイデアしか出ませんが、たくさん集まれば集まるほど、アイデアの幅は広がる、ということを実感しました。

【最後に 山口氏を囲んで】



今回のセミナーでは、50名を超える方が参加し、意識の高さを感じました。“思い続ければ実現する”という山口氏の言葉にもあるように、問題に気付いた私たち一人一人ができることから続けていくことの大切さを感じました。

この「出会い」が今後のそれぞれの活動につながっていきますように。